

Title	江戸名物 勘助地藏の話
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.4 (1925. 12) ,p.140(608)- 140(608)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19251200-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

すのみのことであつた。

日前國懸神社から自動車で和歌山市内に入り、アラクリ町を左折して元寺町なる帶伊書店を訪ね、増穂の薄、熊野遊記(熊野名勝圖繪)根來寺焼討太田貴細記その他の珍本を見て辭去し、直に海南電車和歌山市驛に到り、終日案内の勞をとられし谷井木村兩氏の厚意を深謝しつゝ五時三十五分發車、大阪に向ふ。

七時五分大阪難波驛着、鳥羽で別れた土居氏に迎へられて大阪ホテルに會食しこゝに一先づ解散することとなつた。顧れば今次の旅行の日程は鳥羽で一日嵐のために留められたほかは、すべて順調に經過した。唯殘念だつたのは兵役點呼其他の關係で學生の参加が少かつた事と、土居氏が中途病を得て鳥羽から引返したことであつた。終に臨み各地に於て一行の爲めに貴重なる寶物類を展覧せしめられた方々並に種々斡旋の勞を執られし松坂の小津氏、鳥羽の酒本氏、紀州歸省中の松本、山本兩氏、新宮の小野氏、和歌山の谷井氏及び木村氏等に厚く感謝の意を表して摺筆する。(大澤記)(伊木校閲)

江戸　名物　務助地蔵の話

芝愛岩町の萬年山青松寺は震災の節焼失したが、市内屈指の由緒ある大刹で、岡寺境内山手墓地に行く石段の中程、左手に『西方地藏助地藏尊』と新しい木額の掲げである石祠があり、中に容貌頗る俗人の庭像がある。俗に『奴地蔵、槍持勘助』と呼び、大橋義三氏の『東京古蹟』には

松平三河守抱へ槍持奴なるが、平生預る槍と云ふは本多豊後守康孝が戰場にて用ひし物、康孝晩年之を結城秀康に贈り、男ならでは今の世に之を用ふる者候ふまじと云ひし由にて、實に長くして重き非常の物ゆへ、勘助或時キット思案し、かくて此まま置かんには必ず不調法を爲す者出來、あたら若士を罪する事生すべし、いて此身の一命を以て代へんと、やがて其槍の柄三尺ほど切折り切腹して果てたりとなん、石段の左手小堂の中に石像ありて、元祿十四云々歸眞英善富俊信士芦田義勝云々など其袖の所に刻してあれば、本名は芦田義勝といひしものが、墓守の話によると、眞物の勘助地蔵は山の奥にあるが、謡語に不便なのでこゝに出店として持へたものである。(石祠の前に『文久二戌年九月喜捨本多利國』と刻しある石碑があるから、この頃出来たものか)この勘助は痔に悩み、その爲め酒が飲めなかつたので痔病に困る人の願を適へ、全治の上は御禮として御酒を上げる。然し近頃は縁談を始め色々の御願をする人があると云ふ事である。勘助も仲々忙しい事であらう。(大橋氏の記したのは出店の方である。)猶右の眞物の地蔵といふものを見に行つた處、略同形の石像で、雨露に曝され其の肩に芦田——元祿十四年巳年と刻んであるのが讀めた。又もう一つ出店の地蔵といふものがあるが、これは普通の地蔵であるから誤であらう。この様に本店の佛様よりは出店の方が繁盛するは例の多い事であるが、民間信仰研究の面白い一資料であらう。猶又出店の向う側に修養菴(震災で焼失)では『奴地蔵願示』の御影と云ふ木版一枚のものを頬つて居る。(埃塵錄より)